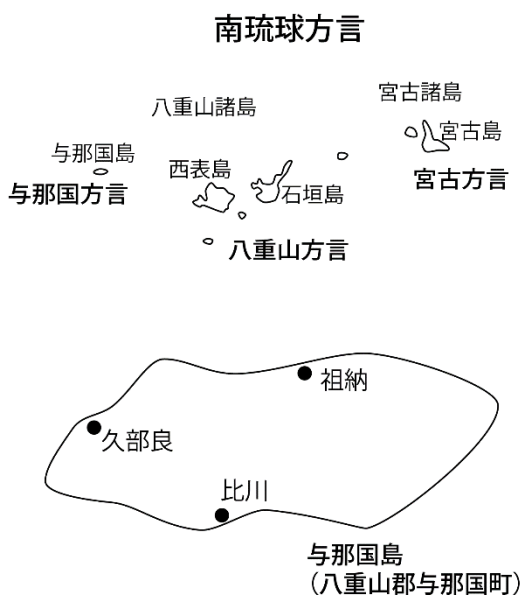


沖縄県与那国方言



沖縄県与那国方言位置図

【与那国方言について】琉球方言は、北琉球方言と南琉球方言に大きく分かれる。与那国方言は、琉球方言の一種で南琉球方言に属する。与那国方言とは、沖縄県の与那国島（八重山郡与那国町）で話されている方言である。与那国島の人口は1676人（令和2年国勢調査による）であり、与那国方言の話者の数は、50代後半以上の約400人いることが報告されている（山田他2013：205）。与那国島には、祖納、比川、久部良の3つの集落がある。高橋（1997）、山田他（2013）は、これらの集落の間に方言差がないと報告している。そのため、この3つの集落で話されている言語・方言のことを「与那国方言」と呼ぶ。

琉球諸方言における与那国方言の音声・音韻的な特徴は、①母音が基本的に a, i, u の三母音であること（長短の区別がない）②喉頭・非喉頭の対立が語頭にあること（但し、k, tのみ）③「ŋ」の音があることの三つを代表としてあげることができる。

他にも特徴的な音声・音韻現象があるが、複雑なものが多数あり、標準語との対応が分かりにくくなっている。そのため、活用を理解する上で必要最小

限の、音声・音韻の特徴的な変化についてまとめる。

母音が三つに限られているが、標準語の e は i に（手 ti）、o は u に（親 uja）変化している。また、琉球諸方言の多くで、二重母音の ai・ae が e: に、au・ao が o: に変化しているが、与那国方言の場合では、狭母音化の結果、ai・ae は ai になり（藍 ai・蠅 hai）、au・ao は u に変化する（麴 kudi・竿 su）。この変化は三段特殊型動詞の活用に影響している。

子音については、次のようになっている。

標準語の力行子音 k に対応してガ行子音 g が現れる。（酒 sagi）。この変化は、標準語の力行に対応する g 語幹動詞の理解に必要である。さらに、標準語の力行子音に対応してタ行子音 t が現れる場合もある（息 iti）。この変化は、k 語幹動詞の活用に影響する。尚、この変化は、ki が ji に対応するものとも関係していて（肝 ŋimu）、「切る（tsun）」を理解するにあたって必要である。標準語の力行子音に対応してハ行子音が現れる（黒 φuru）。これは三段特殊型動詞の「食べる φun（食らう由来）」との対応を理解するにあたって必要である。

標準語のガ行子音に対応して ŋ が現れる。（東 anai）。この変化は、ŋ 語幹動詞の理解に必要である。また、標準語のガ行子音に対応して di が現れる場合もある（右 nidi）。この変化は、標準語のガ行に対応する g・ŋ 語幹動詞の活用に影響している。

標準語のザ行子音に対応して d が現れる（風 kadi）。また、dzi の音消失と鼻音化も見られる（妻 tun（刀自に由来））。この変化は、d 語幹動詞の活用に影響する。

語頭の ki・ku、φu・çi、tsu、ji の音消失に伴う喉頭音化がある（聞く k²un、蓋 t²a、柄 k²a）。これらの変化は、k 語幹動詞の吹く k²un、三段特殊型の k²un（使う）等との対応を理解する上で必要である。

標準語のワ行子音に対応してバ行子音が現れる（藁 bara）。これは語頭に見られる。この変化は、標準語のワ行との対応を理解する上で必要である。

標準語のリに対応してイが現れる（針 hai）。これは r の音消失である。この変化は、r 語幹動詞の活

用を理解する上で必要である。

【表記について】喉頭化音は、音節の左上に「ʔ」を付す(聞く:ʔクン)。有声軟口蓋鼻音ŋは、カ行の右上に「°」を付す(カ°)。また、合拗音化したものは、ウ段のカナの後に小添字「ァ」を付す(ウ段+ァ:ウバン(覚えた)。但し、タ行の場合は、オ段のカナの後に小添字「ァ」を付す:トァン(取っ

た))。焦点化(特立)助辞を表す「du」は「ドウ」で表す。尚、「tu」は「トゥ」で、「tsu」は「ツ」で表す。第二中止形を表す「ti」という音声は、「ティ」で表す。口蓋化した「ji」は、「シ」で表す。

【調査概要】本稿のすべての記述は、筆者が調査・収集したデータに基づく。調査協力者は、与那国島で生まれ育った70、90代男性、90代女性である。

沖縄県与那国島方言の活用表

《動詞: 三段一般型、三段特殊型、一段型》

		三段一般型 書く	三段特殊型 洗う	一段型 開ける
終止類	断定非過去	カグン	アルン	アギルン
	断定過去	カティタン カチャン	アラタン アラン	アギタン アギヤン
	命令	カギ	アライ	アギリ
	禁止	カグンナ	アルンナ	アギンナ
	意志	カグ(ン) カティンダンギ	アル(ン) アラインダンギ	アギル(ン) アギンダンギ
	推量	カグハディ	アルハディ	アギルハディ
接続類	連体非過去	カグ	アル	アギル
	連体過去	カティタル カチャル	アラタル アラル	アギタル アギヤル
	中止	カティ カティティ	アライ アライティ	アギ アギティ
	仮定	カティカ°シヤ カティタヤ カグバ	アライカ°シヤ アラタヤ アルバ	アギカ°シヤ アギタヤ アギルバ
派生類	否定	カガヌン	アラヌン	アギラヌン
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	使役	カガミルン	アラミルン	アギラミルン
	受身	カガリルン	アラリルン	アギラリルン
	可能	カガリルン カティツン	アラリルン アライツン	アギラリルン アギツン
	尊敬	カティワルン	アライワルンアギワルン	アギワルン
	継続	カティブン	アライブン	アギブン
	希望	カティブサン	アライブサン	アギブサン
	のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)

《動詞：不規則型》

		不規則型 来る	不規則型 思う	不規則型 叱る
終止類	断定非過去	クン	ウム	イユン
	断定過去	スタン	ウムタン	イタン
		スン	ウムァン	ヤン
	命令	ク (ー)	ウムイ	イー
	禁止	クンナ	ウムンナ	イユンナ
	意志	ク (ン)	ウム (ン)	イユ (ン)
シンダング		ウムインダング	インダング	
推量	クハディ	ウムハディ	イユハディ	
接続類	連体非過去	ク	ウム	イユ
	連体過去	スタル	ウムタル	イタル
		スル	ウムアル	ヤル
	中止	シー	ウムイ	イー
シティ		ウムイティ	イティ	
仮定	シガ°シヤ	ウムイガ°シヤ	イガ°シヤ	
	クタヤ	ウムタヤ	イタヤ	
	クバ	ウムバ	イユバ	
派生類	否定	クヌン	ウマヌン	イヤヌン
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	使役	クラミルン	ウマミルン	イヤミルン
	受身	クラリルン	ウマリルン	イヤリルン
	可能	クラリルン	ウマリルン	イヤリルン
		シーツン	ウムイツン	イーツン
	尊敬	ワルン	ウムイワルン	イーワルン
	継続	シーブン	ウムイブン	イーブン
	希望	シーブサン	ウムイブサン	イーブサン
のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		甘い	元気 (だ)	学生 (だ)
終 止 類	断定非過去	アマン	ガンドウ (ドウ アル)	ガクセー (ドウ アル)
	断定過去	アマタン	ガンドウドウ アタル	ガクセードウ アタル
	推量	アマルハディ	ガンドウ (ドウ アル) ハディ	ガクセー (ドウ アル) ハディ
接 続 類	連体非過去	アマル	ガンドウナ	ガクセードウ アル
	連体過去	アマタル	ガンドウドウ アタル	ガクセードウ アタル
	中止	アマビティ	ガンドウドウ アイティ	ガクセードウ アイティ
	仮定	アマタヤ	ガンドウドウ アタヤ	ガクセードウ アタヤ
派 生 類	否定	アマ ミヌン	ガンドウ アラヌン	ガクセー アラヌン
	なる	アマ (グ) ナルン	ガンドウ ナルン	ガクセー ナルン
	副詞	アマ (グ)	ガンドウニ	(該当形 欠)
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

与那国方言の規則的な活用型は、三段型と一段型に分かれる。与那国方言の規則的な活用型が三段型と一段型に分かれるのは、与那国方言の母音体系が基本的に a, i, u の三母音で構成されていることによる。

所属語彙については、類に属する、一々の動詞が同じような規則で活用しないものがある。そのため、「開ける」類と一括りにすることができない場合がある。

三段型は一般型と特殊型に分かれる。三段一般型の基幹は、ア段、イ段、ウ段である。三段型の所属語彙は、a類の「書く」類の動詞である。また、b類の上一段活用動詞の「見る(ンヌン)」「着る(ツン)」も、三段型の所属語彙である。尚、語幹末子音 b, m, n, t, d を除く、他の語幹末子音は、音韻変化の結果、語幹末子音が変わったり、一部の活用形で基幹が変わったりするので、注意が必要である。例えば、標準語の力行動詞、聞く(?クン)の中止形は、「?ティ」というように変化する。これらについては各活用形において記述する。

三段特殊型の基幹は、ア段、ウ段である。該当する語彙は、「洗う(アルン)」「買う(クン)」「食べる(フン)」「食らう」由来である。これらは、三段一般型の中止形と命令形が基幹イ段形となっている

ものと異なって、「アライ(洗う・洗え)」「カイ(買って・買え)」、「ハイ(食べて・食べろ)」となっていて、基幹ア段にイが続く点で、特殊型である。尚、「洗う(アルン)」は r 語幹動詞であり、「買う(クン)」は k 語幹動詞、「食べる(フン)」は h 語幹動詞である。

一段型の基幹は、イ段である。一段型の所属語彙は、a類の「死ぬ(ンニルン)」、b類の上二段活用動詞の「起きる(ウギルン)」等、下二段活用動詞の「開ける(アギルン)」等、サ行変格活用動詞の「する(キルン)」である。また、一段型の動詞は、一部の活用形で r 語幹化している。例えば、命令形は、「死ぬ」の場合「ンニリ」であり、「起きる」の場合「ウギリ」、「開ける」の場合「アギリ」、「する」の場合「キリ」である。

不規則的活用をする動詞は、a類の「居る」類の動詞「居る(ブン)」「ある(アン)」「ない(ミヌン)」、b類の「来る(クン)」があげられる。他にも、「やる(イルン)」「思う(ウムン)」「叱る(イユン)」があげられる。

ブン(居る)は、断定非過去形の場合、語幹末子音が b であるが、r 語幹動詞で、語幹前の母音が u である「トゥルン(取る)」「ブルン(折る)」と同じように活用すること、第二過去形を持たないことで、不規則的な活用をする。

アン(ある)、ミヌン(ない)は、命令形、禁止形、

意志形を持たないこと、第二過去形をもたないこと、ミヌンの場合否定形を持たない点で不規則的な活用をする。

クン（来る）は、基本的に k 語幹動詞であるが、s 語幹動詞、r 語幹動詞の活用を持っていること、一方で、それらとは異なる手続きで否定形が作られること、命令形がどの活用型とも異なる手続きで作られることから不規則的な活用をする。

イルン（やる）は、基本的に r 語幹動詞であるが、第二過去形、使役形、中止形の場合 s 語幹を持つ。r 語幹と s 語幹を合わせ持つ点で、不規則な活用をする。

ウムン（思う）は、基本的に m 語幹動詞であり、三段一般型に近い活用形を持っている。しかし、中止形で語幹末子音に -ui が後接すること、第一過去形で -utan が後接すること、第二過去形で合拗音化するという点で不規則的な活用をする。

イユン（叱る）は、基本的に j 語幹動詞であり、三段特殊型に近い活用形を持っている。しかし、中止形、過去形、命令形の基幹が、母音 i になる点で不規則的な活用をする。

(2) 各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

断定非過去形は、三段一般型と特殊型の場合、基幹ウ段形に「ン」を後接させた形である（例：ヌムン（飲む））。但し、s 語幹動詞の場合、su を脱落させた形になる（例：ウトウン（落とす））。一段型の場合は、基幹イ段形に「ルン」を後接させる（例：アギルン（開ける））。

不規則に活用する動詞の断定非過去形は、次のようになっている。

ブン（居る）、アン（ある）、ミヌン（ない）、クン（来る）、イルン（やる）、ウムン（思う）、イユン（叱る）

断定非過去形は、未来の予定、未来に出来事が実現することについての確信的断定、現在の反復・習慣的な出来事、脱時間化した一般的な法則を表す。

・スナティヤ アッタ マツリニ ンヌン ウトウンドー。（兄は明日祭りで太鼓を叩くよ。）
・カリ マイピタティ キタヤ、イー フン。（彼はもう少ししたらご飯を食べる）

・アヌヤ イーチン クジマングル ニンドウンドー。（私はいつも9時ごろに寝るよ。）
・[?]トウヤ イッチャルバンヤ ンニルン。（人はいつか死ぬ。）

〈断定過去形〉

断定過去形には、第一過去形-(i)tan と第二過去形①-(j/w)an/ ②-unの二つの形がある。タトゥン（立つ）やニンドゥン（寝る）等のような、動作と変化の意味を共にもつ二側面動詞はどちらの形式でも現れる。使用にあたっては、多くの話者が第二過去形を典型的な過去形と認識していることが多い。尚、第二過去形の①の形は、動詞の中止形に存在動詞「アン（ある）」を組み合わせた分析的形式が融合化した形である。②の形の詳しい由来は未だ不明である。

第一過去形は、過去の一回的出来事、過去の反復・習慣的な出来事を表す。パーフェクトは表さない。

三段一般型の第一過去形は、基本的に、第一中止形基幹イ段に「タン」を後接させる。但し、音韻変化の結果、語幹末子音が k, g の場合は t に変わり、ŋ の場合は d に変わる。したがって、キとギはティにし、キ°はディにしてタンを後接させる。

k>t [?]ティ（聞いて）[?]ティタン（聞いた）
g>t カティ（書く）カティタン（書いた）
ŋ>d クディ（漕ぐ）クディタン（漕いだ）

また、第一中止形の基幹イ段を脱落させた形に「タン」を後接させる場合がある。この場合の動詞は、s, r 語幹動詞、d 語幹動詞の「ンドゥン（言う）」である。s 語幹の場合は ji の脱落であり、r 語幹の場合は i の脱落（歴史的には古い段階で、ri>r を経て、促音便化からの脱落の可能性もある）、d 語幹の場合は di（あるいは dzi）の脱落である。

s バガシ（沸かして）バガタン（沸かした）ウ
トウシ（落として）ウトウタン（落とした）
r バイ（割って）バタン（割った）トウイ（取
って）トウタン（取った）

d ンディ（言って）ンタン（言った）
ts 語幹動詞の「ツン（知る）」の過去形は、語末の「ン」を「タン」に変える点で特殊である。

ツン（知る）ツタン（知った）

三段特殊型の第一過去形は、基幹ア段に「タン」を後接させる（それぞれの語幹末子音に -atan を後接させる）。

アルン (洗う) アラタン (洗った)

クン (買う) カタン (買った)

フン (食べる) ハタン (食べた)

一段型は、三段一般型と同じように、第一中止形基幹イ段に「タン」を後接させる。

ンニ (死んで) ンニタン (死んだ)

ウギ (起きて) ウギタン (起きた)

アギ (開けて) アギタン (開けた)

キ (して) キタン (した)

不規則な活用型の動詞の場合では次のようになっている。

ブン (居る) ブタン (居た)

アン (ある) アタン (あった)

ミヌン (ない) ミヌタン (なかった)

クン (来る) スタン (来た)

イルン (やる) イタン (やった)

ウムン (思う) ウムタン (思った)

イユン (叱る) イタン (叱った)

第二過去形①-(j/w)an/ ②-un は、過去の一時的な出来事を表す。パーフェクトを表す場合に使われることが主である。第二過去形の①の形は基本的に動作を表す動詞の形であり、第二過去形の②は基本的に変化を表す動詞の形である。

三段一般型の第二過去形は、①の場合、基本的に第一中止形基幹イ段をア段拗音化したものに「ン」を後接させる (語幹末子音に-jaN を後接させる)。

ヌミ (飲んで) ヌミヤン (飲んだ)

?ティ (聞いて) ?ティヤン (聞いた)

カティ (書いて) カティヤン (書いた)

クディ (漕いで) クディヤン (漕いだ)

r 語幹動詞の語幹前の母音が u である場合は、r 語幹動詞の第一中止形のイを脱落させ、u をア段合拗音化させたもの (-wa) に、「ン」を後接させる (歴史的には、古い段階で ri>r を経て、tur an>twan の合拗音化、あるいは、r の促音便化とその促音が脱落した後、語幹前の母音 u が補助動詞アン (ある) の母音 a と相互に作用した結果、合拗音化した可能性もある)。

トウイ (取って) トアン (取った)

ウイ (織って) ウァン uwan・ワン (織った)

また、r 語幹動詞で、語幹前の母音が a の場合は、断定非過去形の「ルン」を「ン」に変えた形で表す。

バルン (割る) バン (割った)

ワルン (いらっしゃる) ワン (いらっしゃった)

三段一般型で、②の活用をする場合は、基幹ウ段に「ン」を後接させる (語幹末子音に-un を後接させる)。ニンドウン (眠る・寝る) のように、一部断定非過去形と断定第二過去形②が同じ形になるものもある。

ウムン (熟す) ウムン (熟した)

ニンドウン (眠る) ニンドウン (眠った)

カラグン (乾く) カラトゥン (乾いた)

三段特殊型は、基幹ア段に「ン」を後接させる (語幹末子音に「-an」を後接させる)。三段特殊型で②の活用をするものは確認されていない。

アルン (洗う) アラン (洗った)

クン (買う) カン (買った)

フン (食べる) ハン (食べた)

一段型で、①の活用をするのは「アギルン (開ける)」「キルン (する)」「ウブイルン (覚える)」である。三段一般型と一部同じように、第一中止形の基幹イ段をア段拗音化させたもの (-ja) に「ン」を後接させる場合と、ア段合拗音化させたもの (-wa) に「ン」を後接させた場合がある。

アギ (開けて) アギヤン (開けた)

キ (して) キヤン (した)

ウブイ (覚えて) ウブァン (覚えた)

一段型で②の活用をするのは、ウギルン (起きる)、ンニルン (死ぬ) 等である。この場合、第一中止形基幹イ段をウ段にして「ン」を後接させる (語幹末母音 i を un に変える)。

ウギ (起きて) ウグン (起きた)

ンニ (死んで) ンヌン (死んだ)

カリ (枯れて) カルン (枯れた)

但し、ヒルン (行く) は、口蓋音化したウ段拗音の形「ヒユン (行った)」で現れるものもある。このタイプは、他にニユン (煮えた) が確認されている。

不規則活用型の動詞の第二過去形は、次のようになっている。

イルン (やる) イシヤン (やった)

クン (来る) スン (来た)

ウムン (思う) ウムァン (思った)

イユン (叱る) ヤン (叱った)

・オダノブナガヤ ホンノージニ {ンニタン}

／ンヌン}。(織田信長は本能寺で死んだ。)

[一回的な出来事]

・ンカチャ マラリアシ イーチン ?トゥガ
{ンニタン／×ンヌン}。(昔はマラリアでい
つも人が死んだ。)[反復・習慣]

・アヌヤ ブトゥティ サギ {アギタン／ア
ギヤン}。(私は一昨日酒瓶をあけた。)[一回
的な出来事]

・ンカチャ イヤヤ イーチン カミヌ ッタ
ー {アギタン／×アギヤン}。(昔お父さん
はいつも瓶の蓋をあけた。)[反復・習慣]

〈命令形〉

与那国方言の命令形は、一方的な命令から、忠告、助言、勧め、励まし、願望を表す。助言、勧め、励ましを表す場合、終助辞ヨ・ユヤハイが後接することが多い。願望を表すのは、無意志動詞等、コントロールすることのできない出来事を表す動詞が命令形をとった場合である。

三段一般型の命令形は、基幹をイ段形にした形である(語幹末子音に-iを後接させる)。三段一般型の命令形は、語幹末子音がb, n, m, t, ts, dの場合、第一中止形と同じ形になるが、それ以外の子音の場合は、異なる形になる。

b トゥブン(飛ぶ)トゥビ(飛べ)トゥビ(飛んで)

n ンヌン(見る)ンニ(見ろ)ンニ(見て)

m ヌムン(飲む)ヌミ(飲め)ヌミ(飲んで)

t ムトゥン(持つ)ムティ(持て)ムティ(持って)

ts ツン(切る)チー(切れ)チー(切って)

d カンドウン(被る)カンディ(被れ)カンディ(被って)

k ?クン(聞く)?キー(聞け)?ティ(聞いて)

g カグン(書く)カギ(書け)カティ(書いて)

ŋ ククン(漕ぐ)クキ°(漕げ)クディ(漕いで)

r トウルン(取る)トゥリ(取れ)トゥイ(取って)

語幹末子音がsの場合、第一中止形シjのjが脱落したイを後接させる。

-ajī バガシ(沸かして)バガイ(沸かせ)

-ujī ウトウシ(落として)ウトウイ(落とせ)

三段特殊型の命令形は、基幹ア段にイを後接させた形である(語幹末子音に-aiを後接させる)。三段特殊型の命令形も中止形と同じ形になる。

アルン(洗う)アライ(洗え)

クン(買う)カイ(買え)

フン(食べる)ハイ(食べろ)

一段型の命令形は、第一中止形基幹イ段にリを後接させる。

ウギ(起きて)ウギリ(起きろ)

アギ(開けて)アギリ(開けろ)

ンニ(死んで)ンニリ(死ね)

キ(して)キリ(しろ)

不規則活用型の命令形は、次のようになっている。

ブイ(居て)ブリ(居ろ)

シー(来て)ク(ー)(来い)

イシ(やって)イリ(やれ)

ウムイ(思っ)ウムイ(思え)

イー(叱って)イー(叱れ)

・?ツリン ヌミ。(薬も飲め)[命令]

・サビサビヌ ムヌティンタドウ ハイユ。
([健康のために] あっさりしたものを食べろよ)[忠告]

・?ティ ンニ。(〔沖縄の生活のことはあいつに〕聞いてみる)[助言]

・イビタティ ヌミハイ。(少し[酒を]飲めよ)[勧め]

・ギハリユ。(がんばれよ)[励まし]

〈禁止形〉

琉球諸方言では否定形接辞を元にした禁止形があるが、与那国方言の禁止形は、否定接辞を持たないで表現される。禁止形は、予防的な禁止と制止的な禁止を表す。

三段一般型の禁止形は、基幹ウ段にンナを後接させた形である(断定非過去形にナ、あるいは、語幹末子音に-unnaを後接させた形)。

ヌムン(飲む)ヌムンナ(飲むな)

カグン(書く)カグンナ(書くな)

ニンドウン(寝る)ニンドウンナ(寝るな)

語幹末子音s, rの場合、断定非過去形の基幹ウ段を脱落させた形にンナを後接させる(s語幹動詞の場合、断定非過去形にナを後接させ、r語幹動詞の場合は断定非過去形のルンにンナに変える)。

- s バガン (沸かす) バガンナ (沸かすな)
 ウトゥン (落とす) ウトゥンナ (落とすな)
 r バルン (割る) バンナ (割るな)
 トゥルン (取る) トゥンナ (取るな)

三段特殊型の禁止形は、三段一般型に準ずる。

- アルン (洗う) アルンナ (洗うな)
 クン (買う) クンナ (買うな)
 フン (食べる) フンナ (食べるな)

一段型の禁止形は、第一中止形基幹イ段にンナを後接させた形である。

- ウギ (起きて) ウギンナ (起きるな)
 アギ (開けて) アギンナ (開けるな)
 ンニ (死んで) ンニンナ (死ぬな)
 キ (して) キンナ (するな)

不規則活用型の禁止形は、次のようになっている。

- ブン (居る) ブンナ (居るな)
 クン (来る) クンナ (来るな)
 イルン (やる) イルンナ (やるな)
 ウムン (思う) ウムンナ (思うな)
 イユン (叱る) イユンナ (叱るな)
 ・オレンジジュースヤ ヌムンナ。スナティヌ
 ジュースドウ アルド。(オレンジジュース
 は飲むな。お兄ちゃんのジュースだよ。)
 ・ウマンキ クンナ。([向かってくる人に向か
 って] ここに来るな。)

〈意志形〉

意志形は、A) 断定非過去形と同じであるものと、
 B) 勧誘形と同じであるものがある。A) の形は、
 80、90 代の話者に確認されるもので、語尾の「ン」
 を省略する場合もある。B) の形は、70 代の話者によ
 って確認されたもので、第一中止形イ段に「ンダン
 ギ」を後接させた形である。

- ・[ジュースを飲むか聞かれて] ヌムン！ (飲
 む！)
 ・アマティ クミ ブインダンギ。(しばらくこ
 こにしよう。)

〈推量形〉

推量形は、非過去・過去の連体形に「ハディ」と
 いう単語が組み合わさって作られる分析的な形式で
 ある。

- ・マーシク ンデヤルユンガラ、シカトウ ヌム
 ハディ。(たくさん [飲めと] 言ったから、[薬

を] ちゃんと飲むだろう。)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は、断定非過去形の語末「ン」が脱
 落した形である。

- ・ドウル ヌム ?ツリヤ ンディヤ? (夜飲む
 薬はどれ?)
 ・ジュース ヌマヌ ?トウヤ タヤ? (ジュー
 スを飲まない人は誰?)

〈連体過去形〉

連体過去形は、断定過去形の語末ンを「ル」に変
 える。

- ・トゥムティ ヌミタル ?ツリカン スアー
 ナー? (夜飲んだ薬より苦い?)
 ・ハナコガ ヌマヌタル ?ツリヤ ンディ
 ヤ? (花子が飲まなかった薬はどれ?)

〈中止形〉

中止形は、動詞の場合、肯定の系列では①基幹イ
 段-i、②イ段に「ティ」を後接させた形-iti の二つの
 形がある。前者を第一中止形、後者を第二中止形と
 よぶ。第一中止形は、同時と継起を表すだけでなく、
 アスペクトや試行形等の形作りの要素として使われ
 る。第二中止形は、主に継起を表す。

中止形の活用構造の説明は、第一中止形の説明を
 代表させる。第二中止形は、第一中止形にティを後
 接させるだけである。

三段一般型の第一中止形は、基幹イ段である (語
 幹末子音に-i を後接させた形)。

- トゥブン (飛ぶ) トウビ (飛んで)
 ヌムン (飲む) ヌミ (飲んで)
 ンヌン (見る) ンニ (見て)
 ムトゥン (持つ) ムティ (持って)
 ツン (切る) チー (切って)
 ウトゥン (落とす) ウトゥシ (落として)
 カンドウン (被る) カンディ (被って)

但し、音韻変化の結果、語幹末子音が k、g の場合
 は t に変わり、ŋ の場合は d に変わる。したがって、
 キとギはティになり、キ^oはディになる。

- k>t ?クン (聞く) ?ティ (聞いて)
 g>t カグン (書く) カティ (書く)
 ŋ>d ククン (漕ぐ) クディ (漕ぐ)

語幹子音が r の場合、r を脱落させた形「イ」で現
 れる。

パルン (割る) バイ (割って)

トゥルン (取る) トウイ (取って)

三段特殊型の第一中止形は、基幹ア段に「イ」を後接させる (語幹末子音に -ai を後接させる)。

クン (買う) カイ (買って)

フン (食べる) ハイ (食べて)

アルン (洗う) アライ (洗って)

一段型は、基幹をイ段にする (語幹末子音に -i を後接させる)。

ンニルン (死ぬ) ンニ (死んで)

ウギルン (起きる) ウギ (起きて)

アギルン (開ける) アギ (開けて)

キルン (する) キ (して)

不規則な活用型の動詞の場合では次のようになっている。

ブン (居る) ブイ (居て)

アン (ある) アイ (あって)

ミヌン (ない) ミヌンキ (なくて)

クン (来る) シー (来て)

イルン (やる) イシ (やって)

ウムン (思う) ウムイ (思って)

イユン (叱る) イー (叱って)

・ツリ {ヌミ/ヌミティ}, ニンディヨ。(薬を飲んで、寝なさいよ。)

〈仮定形〉

仮定形は、肯定の系列では A) 第一中止形の基幹イ段に「ガ^oシヤ」が後接した形と、B) 第一過去形の語末「ン」を「ヤ」に変えた形、C) 断定形の語末ンが脱落したものに「バ(ヤ)」を後接させた形がある。

A タイプは、従属文の述語として用いられると、主文との間に条件・結果 (すれば)、前提・結論 (するなら・したら) の因果関係を表す。B タイプは、主に前提・結論 (するなら・したら)、契機・結果 (すると・したら) を表す。C タイプは、古い形であまり用いられないが、条件・結果だけでなく、原因理由・結果の関係を表すために使われる。

・ヌミガ^oシヤ、ハイグ ヌルンド。(〔薬を〕飲めば・飲んだら、早く治るよ。)

・ヌミタヤ、ヌンナ。(〔酒を〕飲んだら、乗るな。)

・ウミタヤ、キヌ ミヤ ウティルン。(熱した

ら、木の実は落ちる。)

・マ イビタティヤ キルバ、ハナヤ カリルン。(もう少しすれば、花は枯れる。)

〈否定形〉

否定形は、述語にさしだされる出来事・特徴が時間の中に実現しないこと、出来事・特徴が人や物に備わっていないことを表す。

三段一般型の否定形は、基幹ア段に「ヌン」を後接させた形である (語幹末子音に -anun を後接させた形)。

トゥブン (飛ぶ) トウバヌン (飛ばない)

ヌムン (飲む) ヌマヌン (飲まない)

ンヌン (見る) ンナヌン (見ない)

ムトゥン (持つ) ムタヌン (持たない)

ツン (切る) ツァヌン (切らない)

カンドウン (被る) カンダヌン (被らない)

トゥルン (取る) トウラヌン (取らない)

但し、s 語幹動詞の否定形は、sa が脱落して音韻変化した結果、異なる形で活用する。

語幹末子音の前の母音が a の場合 (例: bagasun 沸かす)、s が脱落し (bagaanun)、脱落した語幹末子音 s の前後の母音 a が同化して一つになった形で現れている。このように、s の前後に母音 a があることで、s が脱落すると推定する可能性は、司 tsukasa>^oka (:) の音韻変化の例によって示唆される。結果として、基幹ア段 sa を脱落させた後、語幹末子音の前の母音に「ヌン」を後接させる、あるいは、断定非過去形の「ン」を「ヌン」に変えるという手続きをとって使用することができる。

バガン (沸かす) バガヌン (沸かさない)

また、語幹末子音の前の母音が u の場合 (例: utusanun 落とす) は、二つの過程を経たと考えられる。まず、(1) s が脱落し (utuanun)、語幹末子音の前後の母音 u と a が相互に作用して合拗音化した後 (utwa)、さらに、(2) 直音化したものに (uta)、「ヌン」が続く形で (utanun) 現れていると考えられる。(1) の過程の可能性は「干す hun/干さない hwanun」の例によって、(2) の過程の可能性は、「遠い twan>tan」の例によって示唆される。

結果として、基幹ア段 sa を脱落させた後、語幹末子音の前の母音 u を a に変えて、合拗音化させたものの、さらに直音化させたものに「ヌン」を後接させ

るという手続きをとって使用することができる。

ウトゥン (落とす) ウタヌン (落とさない)
フン (干す) ファヌン (干さない)

三段特殊型の否定形は、基幹ア段に「ヌン」を後接させた形である(三段一般型と同じように、語幹末子音に-anun を後接させる)。

アルン (洗う) アラヌン (洗わない)
クン (買う) カヌン (買わない)
フン (食べる) ハヌン (食べない)

一段型は、否定形で r 語幹化している。そのため、一段型の否定形は、三段一般型の r 語幹動詞の場合に準じる。基幹イ段に「ラヌン」を後接させる。

ンニルン (死ぬ) ンニラヌン (死なない)
ウギルン (起きる) ウギラヌン (起きない)
アギルン (開ける) アギラヌン (開けない)
キルン (する) キラヌン (しない)

不規則な活用型の動詞の場合では次のようになっている。尚、アラヌン (～ではない) は、名詞述語文の否定形に使われる。単独では、「違う」と否定する意味でも使われる。形容詞の否定形には、ミヌンを使う。

ブン (居る) ブラヌン (居ない)
アン (ある) アラヌン・ミヌン (ない)
クン (来る) クヌン (来ない)
イルン (やる) イラヌン (やらない)
ウムン (思う) ウマヌン (思わない)
イユン (叱る) イヤヌン (叱らない)

・アブヤ ヌン フルムヌ アタンティン、カティラヌン。(祖母はどんなに古い物であっても捨てない。)

・イヤティトゥ アブタティヌ アガミンタヤ クヌン。(叔父と叔母の子供達は来ない。)

否定の過去形は、否定形の断定形の終わり「ン」を「タン」に変えた形である。

・ヌマヌタン。(「薬を」飲まなかった。)

否定の推量形は、非過去の場合は否定形の終わり「ン」を取って形式名詞「ハディ」と組み合わせた形であり、過去形の場合は、否定形の過去形の終わり「ン」を「ル」に変えて形式名詞「ハディ」と組み合わせた形である。

・ヌマヌハディ。(飲まないだろう。)

・ヌマヌタルハディ。(飲まなかっただろう。)

否定の中止形は否定形にキが後接した「キラヌンキ(しないで)」という形が使われる。キラヌンキは、同時と継起を表したり、アスペクト等の形作りの要素になったりする。

・ツリ ヌマヌンキ、ニンディ ミヌタン。(薬を飲まないで、寝ちゃった。)

否定形の仮定形 A と B は、否定形の語末ンが脱落したものにカ°シヤ、タヤを後接させた形である。

・ヌマヌカ°シヤ、アツタン アンバニヌンド。(飲まなければ、明日も遊べないよ。)

・ムタニヌタヤ、アガ ムティ トウラン。(持てないなら、私が持ってあげよう。)

・ンダガ トウミラヌバヤ、アヌヤ クルマニカリティ、ンヌンヤ。(あなたが止めなかったら、私は車に轢かれて死んでいるね。)

〈丁寧形〉

与那国方言に丁寧形に該当する形は存在しない。

〈使役形〉

使役形は、指令・指示、許可を表す。また、「してもらおう」を表すためにも使われる。使役形の活用形は、一段型の動詞と同じように活用する。

三段一般型の使役形は、基幹ア段に「ミルン」を後接させた形である(語幹に-amirun を後接させる)。

トゥブン (飛ぶ) トゥバミルン (飛ばせる)

ヌムン (飲む) ヌマミルン (飲ませる)

ンヌン (見る) ンナミルン (見させる)

ムトゥン (持つ) ムタミルン (持たせる)

ツン (切る) ツァミルン (切らせる)

ンドゥン (言う) ンダミルン (言わせる)

トゥルン (取る) トウラミルン (取らせる)

但し、ンヌン (見る)、カンドゥン (被る)、ニンドゥン (寝る) の使役形は、ンシミルン (見させる)、カンシミルン (被らせる)、ニンシミルン (寝させる) という形でも使われる。

三段特殊型の使役形は、三段一般型に準じる。

アルン (洗う) アラミルン (洗わせる)

クン (買う) カミルン (買わせる)

フン (食べる) ハミルン (食べさせる)

一段型は、使役形でも r 語幹化している。そのため、一段型の使役形は、三段一般型の r 語幹動詞の場合に準じる。

ンニルン (死ぬ) ンニラミルン (死なせる)

ウギルン (起きる) ウギラミルン (起きさせる)
 アギルン (開ける) アギラミルン (開けさせる)
 但し、キルン (する) の場合は、第一中止形の基幹
 イ段に「ミルン」を後接させる。

キ (して) キミルン (させる)

不規則な活用型の動詞の場合では次のようにな
 っている。

ブン (居る) ブラミルン (居させる)

クン (来る) クラミルン (来させる)

イルン (やる) イシミルン (やらせる)

ウムン (思う) ウマミルン (思わせる)

イユン (叱る) イヤミルン (叱らせる)

・ウトウトウンキヤ ダカントウ サバンヤ
ムタミルン。(弟にはヤカンと湯呑みは持た
 せる。)

・ンダン ニニブサタヤ、ンニティ マグンキ
ンシミタン。(お前も見たかったら、見ろと言
 って、孫に見せさせた。)

・イティグンキヤ ブシ カンシミタン。(いと
 こには帽子を被らせた。)

〈受身形〉

受身形は、他者からの動作の受け取り、すなわち、
 受身を表す。迷惑の受身等の、受影 (動作・変化に
 よって引き起こされる付随的な影響を受けること)
 を表すこともある。尚、受身形は、条件可能を表す
 形と同じである。尊敬の意味を表すことはない。

受身形は、三段一般型の r 語幹動詞と同じように
 活用する。但し、第二過去形は、「-arjan/-arun」の
 ように活用する。

・トゥムルチャ カリニ ナギラリヤン/ナギ
 ラルン。(〔相撲で〕一度あいつに投げられた。)

三段一般型の受身形は、基幹ア段に「リルン」を
 後接させた形である (語幹に-arirun を後接させる)。

ヌムン (飲む) ヌマリルン (飲まれる)

但し、s 語幹動詞の受身形は、sa が脱落して音韻
 変化した結果、異なる形で活用する。この変化過程
 は、否定形の場合と同じようなものであると考えら
 れる。違うのは構成要素「ヌン」であって、「ヌン」
 を「リルン」に変える。

語幹の前の母音が a の場合、基幹ア段 sa を脱落さ
 せた後、語幹の前の母音 a に「リルン」を後接させ
 る、あるいは、断定非過去形の「ン」を「リルン」

に変えるという手続きをとって使用することができ
 る。

ダンダン (壊す) ダンダリルン (壊される)

語幹の前の母音が u の場合、基幹ア段 sa を脱落さ
 せた後、語幹末子音の前の母音 u を a に変えて、合
 拗音化させたもの、さらに直音化させたものに「リ
 ルン」を後接させるという手続きをとって使用す
 ることができる。

ウトウン (落とす) ウタリルン (落とされる)

フン (干す) ファリルン (干される)

三段特殊型の受身形は、三段一般型に準じる。

アルン (洗う) アラリルン (洗われる)

クン (買う) カリルン (買われる)

フン (食べる) ハリルン (食べられる)

一段型は、受身形でも r 語幹化している。そのた
 め、一段型の受身形は、三段一般型の r 語幹動詞の
 場合に準じる。

ンニルン (死ぬ) ンニラリルン (死なれる)

ウギルン (起きる) ウギラリルン (起きられる)

アギルン (開ける) アギラリルン (開けられる)

キルン (する) キラリルン (される)

不規則な活用型の動詞の場合では次のようにな
 っている。

ブン (居る) ブラリルン (居られる)

クン (来る) クラリルン (来られる)

イルン (やる) イラリルン (やられる)

ウムン (思う) ウマリルン (思われる)

イユン (叱る) イヤリルン (叱られる)

・イヤニ ムタカリルンドー。(お父さんに怒ら
 れるよ。)

・マユンキ マタ ハリルンドー。(猫にまた食
 べられるよ。)

〈可能形〉

可能形には、A) 受身形と同形の「リルン」、B)
 動詞の第一中止形とツン (知る) とが組み合わった
 形、二つがある。基本的に、A タイプは条件 (状況)
 可能を表す。B タイプは能力可能を表す。

可能形 A は、三段一般型の r 語幹動詞と同じよう
 に活用する。但し、第二過去形を持たないこと、否
 定形は、基幹ア段に「ニヌン」を後接させること (語
 幹末子音に-aninun を後接させる) という特徴がある。

・ナイヤ ディン ハライバドゥ、アンバリル

ン。(今はお金を払えば、遊べる。)

- ・アッタヤ ヌマニヌンイエー。(明日は飲めないねえ)

可能形 B は、動詞の第一中止形と組み合わせる、三段一般型の ts 語幹動詞ツン(知る)と同じように活用する。但し、三段一般型の ts 語幹動詞ツン(知る)の第一過去形が「ツタン」となっていて、他の三段一般型の ts 語幹動詞の第一過去形とは違うこと、第二過去形を持たないという特徴がある。可能形 B の否定形は、語幹末子音 ts に-anun を後接させる。

- ・カヌ アブヤ ドゥーヤ グマタティドゥブガ、インサル ムヌタン カタミツンドー。(あのおばあさんは体は小さいが、重いものなども担げるよ。)
- ・サギ ヌミツァヌンディ ンドゥドー。(酒が飲めないと言うんだよ。)

〈尊敬形〉

尊敬形は、第一中止形の基幹イ段に「ワルン」という尊敬動詞を組み合わせた形である。また、一部の動詞は尊敬形ではなく、別の単語で補われる。例えば、「いる、行く、来る」の尊敬語は「ワルン」、「死ぬ」は「マイルン」、「飲む、食べる」の場合は「ウヤン」となっている。尚、「眠る、寝る」の場合は、尊敬形を用いて、「ドゥグイワルン(お休みになる)」となる。「書かれる」のような、可能・受身形によって尊敬を表すことはない。

- ・ヌバ ンニワルンガ? (何を見ていらっしゃるの?)
- ・アブ、ナイ ンミバ ワルンガ? (おばあちゃん、今どこにいらっしゃるの?)
- ・ミチコ アブガ マイスンド。(ミチコのおばあちゃんがお亡くなりになったよ。)
- ・アブ、?ツリ ウヤシャナ? (おばあちゃん、薬召し上がった?)
- ・ドゥグイ ワリ。(お休みなさい。)

〈継続形〉

継続形は、第一中止形と人の存在を表す動詞ブン(いる)が組み合わせられた形である。動作動詞の場合は動作の継続を表し、変化動詞の場合は変化結果(状態)の継続を表す。

- ・イヤガ ニムティ チミブン。(父が荷物を積

んでいる。)

- ・ドゥダガ ブリブン。(枝が折れている。)

継続形の否定形は、動詞の第一中止形と組み合わせる存在動詞ブン(いる)の否定形「ブラヌン」を用いる。

- ・ヌミブラヌドー。(「酒を飲んでいるか聞かれて」飲んでいないよ。)

〈希望形〉

希望形は、第一中止形と、フサン(欲しい)が音変化したブサンが組み合わせられた形である。尚、否定形を作る場合は、形容詞の否定形と同じである。

- ・スアー ミヌ ?ツリ ヌミブサン! (苦くない薬が飲みたい!)
- ・スアル ?ツリ ヌミブサ ミヌン。(苦い薬飲みたくない。)

〈のだ形〉

「のだ」形に該当する専用形式は与那国方言にない。

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

与那国方言の形容詞の活用形は、一つである。形容名詞述語と名詞述語は、活用の仕方が多少異なるが、大きくは同じである。そのため、形容名詞述語の活用形は、次節でまとめて記述する。

〈断定非過去形〉

多くの琉球諸方言の形容詞は、標準語の形容詞の「い」で終わるところを「サン・シャン・ハン」にする。与那国方言の場合は、「い」を「ン」にする(例: 高い(タガン)、甘い(アマン))。

形容詞の断定非過去形は、基本的に、語幹に「ン」が後接した形で表す。但し、特立を表すドゥ du が語幹に後接した単語形式と、存在動詞アン(ある)の連体形「アル」が組み合わせられた形で表されることが多い。このことは断定過去形でも同様である。

- ・[おいしいかと聞かれて] マンドー。(おいしいよ。)
- ・[甘いかと聞かれて] アラーグ アマンド。(とても甘いよ。)
- ・チャードゥ アル。(酸っぱい!)

〈断定過去形〉

形容詞の断定過去形は、語幹に「タン」が後接し

た形で表す。

- ・[噂の食堂の料理がおいしかったか聞かれて]
アラグ マータンド。(とてもおいしかったよ。)

〈推量形〉

形容詞の推量形は、肯定の場合、形容詞の連体形(語幹+ル)と形式名詞ハディが組み合わさった形で表される。

- ・マルハディヤ。(「食堂の行列を見て」おいし
いだろうね。)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は、肯定の系列では、断定非過去形の語末「ン」を「ル」に変える。

- ・マル ムヌバガイ フンナ。(おいしいものだけ食べるな。)

〈連体過去形〉

形容詞の連体過去形は、形容詞の語幹に「タル」が後接した形、つまり、形容詞の断定過去形の語末ンが「ル」になった形で表される。

- ・ウトウナサタル ンマガ ?トゥー キャン
キャン。(大人しかった馬が人を蹴った。)

〈中止形〉

形容詞の中止形には、肯定の系列では第一中止形「ピティ」と第二中止形「ピ」の二つの形がある。第一中止形は、主に並べを表す。第二中止形は主に原因・理由を表す。この点を考慮して、表には第一中止形のみを代表形として記している。

- ・アラグ マーピティ、マーシク アタン。
(「噂になっているお店の料理が」とてもお
いしくて、[量が] たくさんあった。)
- ・カラビ、ハニヌン。(辛くて、食べられない。)

〈仮定形〉

形容詞の仮定形は、肯定の場合、語幹に「-タヤ」が後接した形である。

- ・マータヤ、ディ ヒンダンギ!(おいしいなら、さあ行こう!)
- ・アマタヤ、フン。(甘いなら、食べる。)

〈否定形〉

形容詞の否定形は、語幹に否定動詞ミヌン(ない)が組み合わさった形で表す。

- ・[お姉さんの手料理はおいしいかと聞かれて]
マー ミヌンドー。(おいしくないよ。)

- ・[あげたお菓子が甘いか?と聞かれて] ナンド
ウ アマ ミヌンドー。(あまり甘くないよ。)

否定の推量形は、形容詞の否定の連体形(語幹+ミヌ)と、形式名詞ハディが組み合わさった形で表される。

- ・マー ミヌハディヤ。(「ぜんぜん料理に手をつけていないので」おいしくないだろうね。)

否定の連体形は、否定形の語末「ン」が脱落した形である。

- ・アマ ミヌ ムヌ ヌミブサン。(甘くないものが飲みたい。)

否定の中止形には、第一中止形「語幹+ミヌンキ」と、第二中止形「語幹+ミヌピティ」の二つの形がある。尚、否定第一中止形は80-90代の話者に使われる。70代の話者は、否定第二中止形を使用する傾向にある。

- ・ンカチャ {マー ミヌンキ/マー ミヌピ
ティ}、イピタティドゥ アタルムヌ。(昔は
「お店の料理が」おいしくなくて、少なかったのに。)

否定の仮定形は、形容詞の否定形の語末「ン」を取り除いたものに、-タヤを後接させた形である。

- ・マー ミヌタヤ、ヒーブサ ミヌン。(おいしくないなら、行きたくない。)

〈なる形〉

「なる形」には、語幹の形と、語幹に「グ」が後接した二つの形がある。

- ・ナイヌ トウヤ ンナニ ツー トウン サ
ガドゥ ナイドゥ ブル。(今の人は着物を着る人も少なくなっている。)
- ・アガミガ マイサグ ナルン。(子供が大きくなる)

〈副詞形〉

形容詞の副詞形は、形容詞の断定非過去形の語末「ン」がない、語幹の形と、語幹に「グ」が後接した形の二通りで表現されている。

- ・チャー ナイ。(「料理を」すっぱくして。)
- ・ミサグ ナンナ。(まずくするな。)
- ・カラグ ?クリ。(辛く作れ。)

〈丁寧形〉

丁寧形に該当する形式は与那国方言にはない。

〈のだ形〉

「のだ」形に該当する専用形式は与那国方言にはない。

【形容名詞述語・名詞述語】

形容名詞述語と名詞述語は、連体形非過去、なる形を除けば、ほとんど同じ活用の仕方をとる。そのため、ここでは形容名詞述語と名詞述語の活用についてまとめた形で記述する。

〈断定非過去形〉

形容名詞述語と名詞述語の断定非過去形には、A) 何も後接しない形と、B) 述語になる形容名詞・名詞に特立を表す「ドウ」が後接して、存在動詞の連体非過去形と同形のアル(ある)と組み合わせさせて出来た形の二つがある。

- ・ハナコヤ イーチン {ガンドウ／ガンドウドウ アル}。(花子はいつも元気だ。)
- ・ハナコヤ {ガクセー／ガクセードウ アル}。(花子は学生だ。)

〈断定過去形〉

形容名詞述語・名詞述語の断定過去形は、述語になる形容名詞・名詞にドウが後接した単語形式と、存在動詞アンの過去連体形「アタル」とが組み合わせさせて出来た形である。但し、特立を表すドウを構成要素に持たない場合もある。

- ・ンヌ、ハナコヤ ガンドウドウ アタル。(昨日、花子は元気だった。)
- ・タルガドウ アヌカン スダ アタル。(太郎が私より年上だった。)
- ・クドゥクタヤ ハナコヤ ガクセードウ アタル。(去年まで花子は学生だった。)

〈推量形〉

形容名詞述語・名詞述語の推量形は、述語になる形容名詞・名詞と形式名詞ハディが組み合わせさせて出来た形である。但し、形容名詞・名詞述語の断定非過去形のBの形式と形式名詞ハディが組み合わせさせて出来た形で表現されることも多い。

- ・ハナコヤ スン {ガンドウハディ／ガンドウドウ アルハディ}。(花子は今日も元気だろう。)
- ・ハナコガドウ タロカン スダハディ。(花子が太郎より年上だろう。)
- ・ハナコヤ マディ ガクセードウ アルハデ

ィ。(花子はまだ学生だろう。)

〈連体非過去形〉

形容名詞の連体非過去形は、形容名詞に「ナ」を後接させた形である。名詞述語の連体非過去形は、名詞に特立を表すドウが後接したものと、存在動詞アンの連体非過去形「アル」とが組み合わせさせて出来た形である。

- ・イチン ガンドウナ ?トウ。(いつも元気な人)
- ・ナイン ガクセードウ アル ドウチ。(今も学生である友達。)

〈連体過去形〉

形容名詞述語と名詞述語の連体過去形は、断定過去形のBの形と同じ形である。つまり、述語になる形容名詞・名詞に特立ドウが後接したものと、存在動詞の連体過去形アタル(あった)が組み合わせさせて出来た形である。

- ・ンヌバギン ガンドウドウ アタル トウガ アマティシ ニューインキャン。(昨日まで元気だった人が急に入院した。)
- ・クドゥクタ ガクセードウ アタル ドウチ。(去年まで学生だった友達。)

〈中止形〉

形容名詞述語と名詞述語の中止形は、形容名詞・名詞にドウが後接したものと、存在動詞アン(ある)の第二中止形「アイティ」が組み合わせさせて出来た形である。

- ・ハナコヤ ガンドウドウ アイティ、マイフナ アガミド。(花子は元気で、良い子だ。)
- ・ハナコヤ ガクセードウ アイティ、タルヤ 会社員ドウ アル。(花子は学生で、太郎は会社員だ。)

〈仮定形〉

形容名詞述語と名詞述語の仮定形は、形容名詞にドウが後接したものと、存在動詞の仮定形アタヤ(あるなら・あれば)とが組み合わせさせて出来た形である。

- ・ムシ ンヌカン ガンドウドウ アタヤ、マー ?ツリヤ ンサルハディ。(もし昨日より元気なら、もう薬はいらないだろう。)
- ・ムシ ハナコガ ガクセードウ アタヤ、クヌ シカマヤ タヌマニヌン。(もし花子が

学生なら、この仕事は頼めない。)

〈否定形〉

形容名詞述語と名詞述語の否定形は、形容名詞・名詞と存在動詞の否定形「アラヌン」が組み合わさった形である。この点で、形容詞の否定形とは異なっている。

- ・ヌンニヤ ガンドウ アラヌン。(昨日ほど元気じゃない。)
- ・ハナコヤ ガクセー アラヌン。(花子は学生じゃない。)

〈なる形〉

形容名詞のなる形は、形容名詞に何も後接しない単語形式である。述語になる名詞のなる形は、その名詞に「行く先(へ・に)」等を表す格助辞「ンキ」が後接した形である。

- ・カディ ヌイティ、ガンドウ ナルン。(風邪が治って、元気になる。)
- ・センモンガッコース ガクセーンキ ナルン。(専門学校の学生になる。)

〈副詞形〉

形容名詞の副詞形は、形容名詞に「ニ」が後接した形である。

- ・ハナコヤ イチン ガンドウニ クラシブル。(花子はいつも元気に暮らしている。)

〈丁寧形〉

丁寧形に該当する形式は与那国方言にはない。

〈のだ形〉

「のだ」形に該当する専用形式は与那国方言にはない。

参考文献

高橋俊三(1997)「琉球列島の言語(与那国方言)」
『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』
所収 pp.413-422 三省堂

山田真寛,トマ・ペラール,下地理則(2013)「与那国語の簡易文法と自然談話資料」(琉球諸語の記述について考える)『人文・社会科学を主体とした先端琉球・沖縄学の次世代研究者の育成・研究推進プロジェクト 成果報告書 vol.2』所収 IIOS
琉球大学国際沖縄研究所

(目差尚太)

方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(8)

活用体系(6)』オンライン先行公開版

公開日:2022年10月10日

冊子版発行日:2023年3月(予定)